

2040年に向けた病院薬剤師の確保と育成

日本病院薬剤師会理事
金沢大学附属病院
崔 吉道 Yoshimichi SAI



2040年に向けてすべての世代の人々が安心して持続可能な医療体制とするために、限られた医療人材が連携して機能する地域医療体制を構築しなければならない。病院薬剤師は院内の様々なチーム医療のキープレーヤーとして、また入院～退院～在宅のシームレスな薬物治療のハブとして欠かせない存在である。しかしながら、病院薬剤師の偏在のために特に地方の中小病院を中心に新しい取り組みはもとより基本的な業務の遂行が困難な状況が顕在化している。

厚生労働科学研究安原班の全国の薬学生を対象とした調査では、内定した就職先病院の8割以上は高度急性期あるいは急性期病院が占め、勤務地は都市部に偏り、薬剤師偏在を裏付けている。しかし、同じ調査で、卒直後に病院薬剤師が不足する地域に就職する意向がないと回答した学生のうちの約4割は、都市部での一定の業務経験の後、将来的に地方部の薬局や病院で勤務する意向を示し、現在、高度急性期や急性期病院を希望あるいは内定している学生のうち実に6割以上が、将来、回復期病院や慢性期病院に行って地域医療に貢献したいと回答していることは注目すべきデータである。就職先の決定要因の第1位は「業務内容・やりがい」で、その後、給与水準、勤務予定地と続く。病院志望者は、専門性の獲得、チーム医療への参加を強く重視し、成長機会を重視する傾向がある。学生実習も進路選択に非常に強い影響を与えており、実習先の指導体制や雰囲気は進路選択に直結する。卒前卒後の臨床研修体制を整備することは、薬剤師の資質向上の必須条件であると同時に、学生や若い薬剤師に選ばれる魅力的な職場の要素でもある。

石川県の地域連携薬剤師共育プログラムは、高度急性期医療が中心となる基幹病院と慢性期・回復期（包括期）を含む地域病院を相互に移籍して合計6～9年間勤務するなかで専門薬剤師等の認定資格を取得するプログラムとなっている。本プログラムの開始後、北陸地方に縁のない関東や近畿地方の学生がインターンシップに訪れ、能登の病院での出向研修に応募するなど、将来の地域を担う薬剤師の確保と育成に繋がっている。令和6年度の診療報酬改定では「薬剤業務向上加算」が新設され、基幹病院から地域病院へ出向研修を含む取り組みが評価されるようになった。また、日本病院薬剤師会では令和8年度の新規事業として複数の施設が連携して研修を実施する「病院間連携研修事業」を開始している。

出向研修を終えた薬剤師が地域医療の現場で得た知見を基幹病院に還元するとともに、地域病院薬剤師の基幹病院への双方向の出向研修モデルが確立すれば、病院薬剤師を介した施設間のシームレスな薬剤情報連携の基盤となり、地域全体の薬物療法の質の向上に寄与する。病院機能の異なる施設間の相互の出向研修を具現化し、施設間の薬剤師の連携を軸に病院内のチーム医療を地域のチーム医療に展開し、「2040年に向けた病院薬剤師の確保と育成」を進めたい。地域全体の住民の医療と健康を支えていくことが、病院薬剤師の文化（普遍的な価値観）として根付くことを心から願っている。